

皇民化期（1937-45）台湾民衆の国語常用運動

— 小琉球「国語講習所」「全村学校」経験者の聞き取り調査を中心に —

藤 森 智 子

（要約）

日本統治下台湾の高い国語普及率は、学校教育と並び 1930 年代に設置された「国語講習所」を中心とした社会教育の普及によるところが大きい。1937 年日中戦争以降、社会教育は台湾民衆を皇民化させる役割を担われ、国語教育を通じての「日本精神の涵養」が訴えられた。本論文では、これら政策の受け手となった台湾民衆の国語常用運動を考察する。調査対象となった小琉球は日本統治期、日本人が極めて少ない離島であった。しかしながら当地では総督府主導の「国語講習所」のほかに、自主的な日本語普及組織「全村学校」が各部落に設置された。聞き取り調査から、それらに通った元生徒たちは講習に識字や基礎的教養の習得を求め、中にはそれにより職業を変えようと考えていた者もあったこと、また「国語」である日本語が、日常生活に属さない、書き言葉や知識吸収の言語と捉えられていたことが明らかになった。

第 1 節 はじめに

日本統治下台湾における国語普及を論じた論著は、今までに数多く見られる。台湾国内でも特に 1990 年代以降多くの台湾史研究が見られ、日本統治期はテーマとして取り上げられる傾向にある¹。台湾総督府や州庁の統計、新聞雑誌記事などを利用して政策や普及の程度を論じるのが既存の研究の特徴である。その多くは総督府主導の政策の考察という「上」からの普及を論じたものであり、実際の政策の受け手である民衆の実態を論じる研究は未だ開拓中の感が否めない²。

本論文は、こうした「上」からの政策を受ける「下」側の国語普及運動を検討する。実際に国語普及にあたった人々がそれらの運動をどのように捉えていたのか、国語教育に何を求めていたのかを面接調査を通じて明らかにし、当時民衆レベルで展開されていた国語普及運動を考察したい。近年、台湾でも日本統治期の聞き取り調査「口述歴史」調査が盛んであるが、その多くは著名人に対する調査である。また、日本人研究者による元教師や高等教育機関卒業生への面接なども行われているが、いずれもエリートを対象としている³。本論文は民衆の国語普及運動を取り上げるものである。調査対象は社会に顕著な功績を残した人物たちではなく、どこにでもいそうな普通の人々である。しかしながら、そうした個人たちの語りから当時の民衆の姿の一端をかいま見ることができるであろう。

本論文で取り上げる「国語講習所」は、1930 年代より台湾各地で組織的大々的に設置された社会教育機関であり、教育を受ける機会のなかった台湾人を対象に国語を中心とした教育を行うものであった。一日 2、3 時間の講習で期間は数ヶ月から長いものは 3 年程度、講習費は無料、

多くは公学校や民間の施設を利用して行われた。その設置目的は台北州を例に見ると、「当該市・街・庄民中国語ヲ常用セサル者ニ対シ国語ヲ習得セシメ兼ネテ公民的教養ヲナス」とされている⁴。領台時より台湾総督府は国語教育を進めてきたが、殊に 1937 年以降日中戦争遂行と同時に皇民化政策が施行され、社会教育は日本語を解さない台湾人の教化の役割を担わされた。「国語」が単なる一言語でなく国民精神の表象であるという考えは、台湾のみならず日本の植民地全体において強調された思想である。国語に通じ、国語を話すことによって日本精神が習得されるという主張は当時新聞雑誌を通して繰り返し強調され、公学校と並び社会教育が日本精神涵養の場と位置付けられたのである⁵。

本論文で扱う台湾民衆たちは総督府の主導する国語普及運動に参加したのであるが、一体彼女らの意図はいかなるものであったのかを、主に彼女らのライフ・ヒストリーの聞き取りから明らかにしたい。面接調査が行われた小琉球は、台湾南部に位置する東港からフェリーで 30 分の離島である。東京、もしくは台北といった政治的中心地から物理的に乖離したこの島には、当時日本人は庄長や警察とその家族など 10 名前後しかおらず、日本語が民衆の日常で話されることはなかった。このように中央からの政治的影響が少なく、日本人も殆どいない地域を取り上げることは、民衆レベルで自発的に行われた国語普及運動を考察する上で有意義であると思われる。本論文は、日本統治期の聞き取り調査の性質上サンプル数は多くはないが、調査対象となった女性たちの人生を聞き取る質的調査により、民衆の国語普及運動の実態を検討する。

第 2 節 小琉球の概況と教育状況

1. 小琉球の概況

小琉球、現在の正式名称屏東県琉球郷は、台湾南部高雄県をさらに南に下った東港から西南 15 キロ、東経 120 度、北緯 22 度に位置する珊瑚礁の島である。面積は 68,018 平方キロメートル、オートバイで小一時間あれば一周できる小さな島である。現在は本福村、漁福村、大福村、南福村、中福村、天福村、上福村、杉福村の八村が存在する。人口は 12,435 名、内男 6,885 名、女 5,550 名 (1999 年 4 月現在) であり、住民の多くは漁業や農業に従事している。

琉球郷公所編『琉球郷志』(入手当時未刊)によると、「琉球」という名称はもともと琉球群島及び台湾とその付属島嶼を指していたが、明の時代に琉球群島を「大琉球」、台湾を「小琉球」と称するようになった。しかし、後に地理が明らかになるにつれて台湾が「大琉球」より大きいことが分かったため、「小琉球」から今日の名称に変更され、その時まだ漢字名のなかったこの島が「小琉球」と称されるようになったという。

小琉球は、三年に一度行われる王爺祭と呼ばれる民間信仰の祭典が台湾内外の文化人類学者から注目されている地域でもある。島民の宗教は上福村に長老派の教会が一軒あるのみで、ほかはほとんどが民間信仰で、至るところに寺廟が見られる。実際小琉球は台湾で最も寺廟の密度が高いと言われる地域でもある⁶。

現在島に住む住民はほとんどが 17 世紀に移住してきた漢族の人々の子孫である。彼らが住む

前に、この島にはマレー・ポリネシア系の原住民が居住していた。Siraya 族に属する Makatau 族だと言われる原住民は、当時人口が 1000 名以上あったが、1630 年代から 40 年代にかけてオランダ人の「討伐」により島から姿を消してしまう⁷。その後に移住してきたのが大多数の島民の祖先にあたる漢族の人々である。

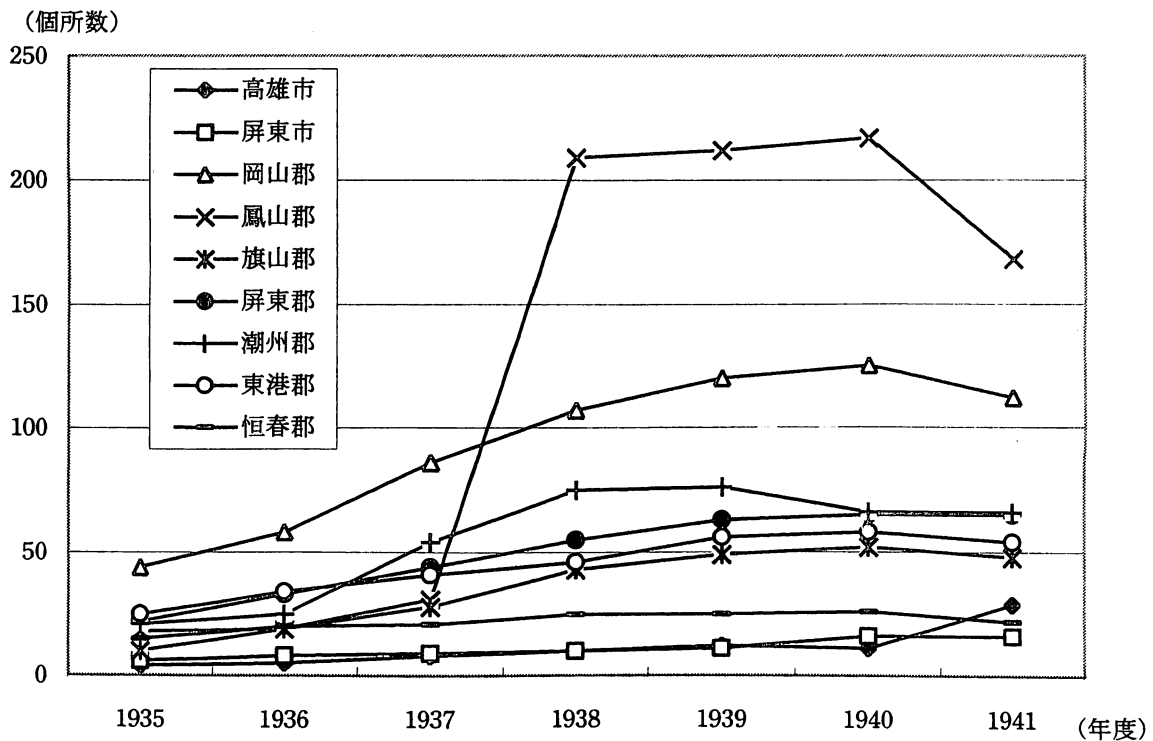
2. 国語普及施設の概況

『琉球郷志』によると、小琉球に初めて教育施設が置かれたのは日本統治期である。台湾総督府は 1898 年 7 月 28 日、公学校令を公布し、全島各地に台湾人向けの初等教育機関を設置した。それから約一年後の 1899 年 9 月、東港公学校琉球嶼分教場が設置されたのがこの地域の組織的な教育の始まりとなった。この島には四書五経を教える「書房」も存在していなかったため⁸、公学校の設置は教育の濫觴となったといえよう。

面接内容からも明らかにされるが、当時公学校に通うことができたのは経済的に余裕のある家庭の子弟のみで、その数は多くはなく、なおかつ卒業に至る者はさらに少なかった。しかもそのほとんどが男子である。女性の場合、就学機会が極めて少なかった。本論文で面接対象となった「国語講習所」の生徒たちは、皆教育機会にめぐまれなかった女性たちである。

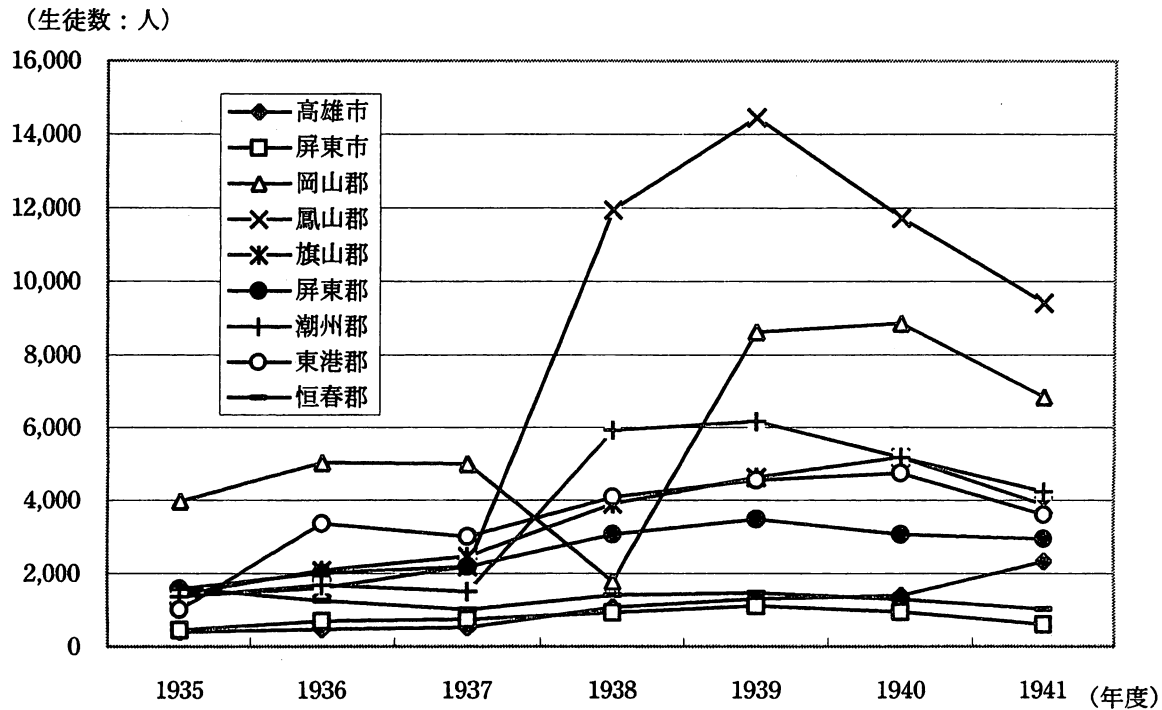
当時の「国語講習所」の設置状況を統計で表してみよう。小琉球は、当時の区画では高雄州東港郡琉球庄である。図 1、図 2 は高雄州郡市別「国語講習所」個所数と生徒数の変遷を示したものである。高雄州には「市」が 2 つ、「郡」が 7 つある。「国語講習所」個所数、生徒数とも 1937

図 1 高雄州郡市別「国語講習所」個所数



出所：『高雄州学事一覧』昭和 10 年度～16 年度より作成。

図2 高雄州郡市別「国語講習所」生徒数



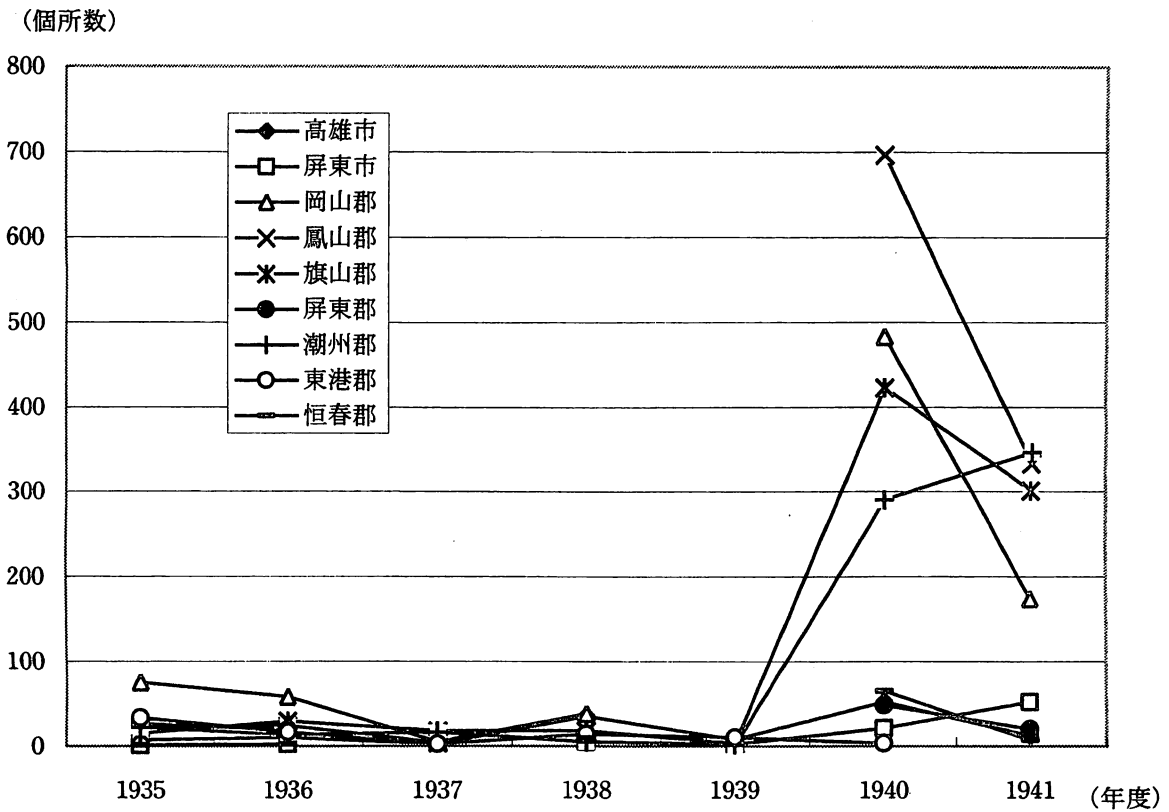
出所：『高雄州学事一覧』昭和10年度～16年度より作成。

年を境に緩やかな、或いは「鳳山郡」のように急激な増加を見せている。これは1937年が皇民化運動開始の年であることが直接的な原因であろう。「高雄市」、「屏東市」などの都市部は一定して個所数、生徒数に変化が乏しく、「国語講習所」の活動が低調であったことが伺える。これは都市部の公学校の就学率が高いことと関連していると考えられる。「東港郡」は、大部分の「郡」と同様に1937年から1940年にかけて緩やかに増加し、1941年に減少している。

一方、図3、図4に示されるように、「簡易国語講習所」は、全般的に個所数及び生徒数に大きな変動はないが、1940年に「岡山」、「鳳山」、「旗山」、「潮州」の各郡で大きな増加を示しており、その翌年にほとんどが減少している。「東港郡」は、その他の「市」、「郡」同様、低いながらも一定の普及を見せている。

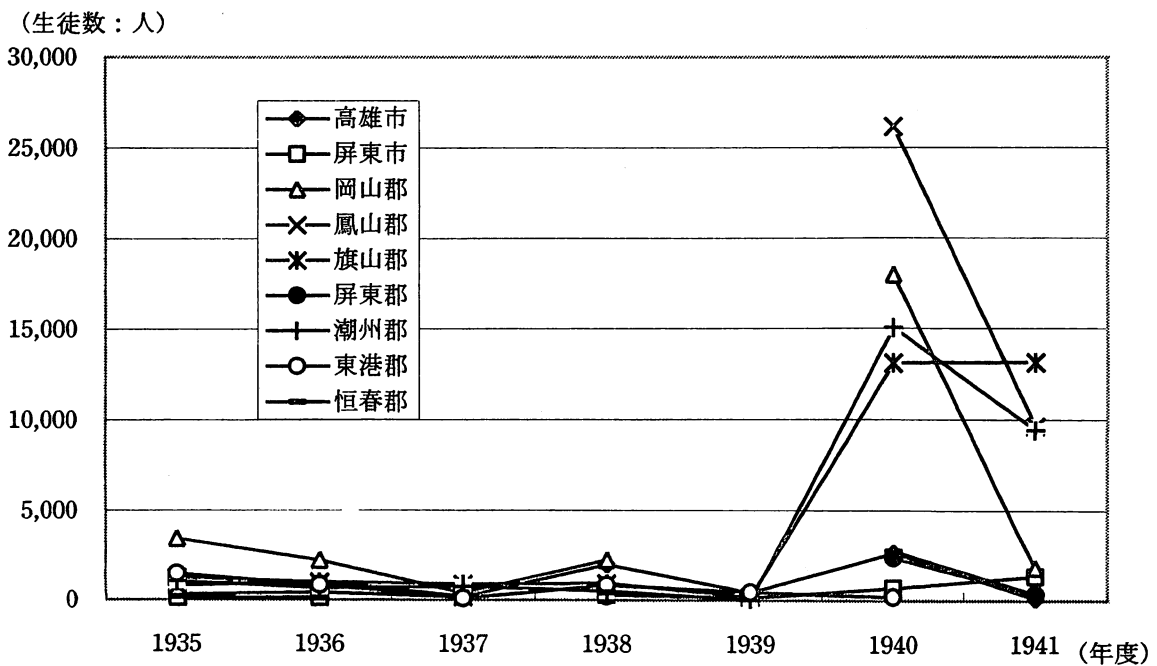
琉球庄に目を転じ、表1を見てみよう。1938年4月1日には「国語講習所」、「簡易国語講習所」がそれぞれ1カ所、2カ所設置されており、同年の10月31日にはそれぞれ2カ所になっている。「国語講習所」の講習期間が1年間から3年間であるのに対し、「簡易国語講習所」は2ヶ月から6ヶ月程度であり、農作業の繁閑に合わせて開設されるため、調査月により数が前後することが考えられる。琉球国民学校に保存されている琉球公学校編『学校沿革誌』によると、「国語講習所」、「簡易国語講習所」は、1941年4月1日には「特設国語講習所」となり、「第一種国語講習所」が琉球国民学校の付設として一学級、「第二種国語講習所」が大寮及び白沙尾にそれぞれ一学級ずつ設置された。すなわち、1941年からは島には「特設国語講習所」が3学級設置されたことになる。

図3 高雄州都市別「簡易国語講習所」個所数



出所：『高雄州学事一覧』昭和10年度～16年度より作成。

図4 高雄州都市別「簡易国語講習所」生徒数



出所：『高雄州学事一覧』昭和10年度～16年度より作成。

表1 琉球庄国語教育施設個所数

| 年月 | 国語教育施設 | 国語講習所 | 簡易国語講習所 | 全村学校 | 国語保育園 |
|-------------|--------|-------|---------|------|-------|
| 1938年4月1日 | | 1 | 3 | - | - |
| 1938年10月31日 | | 2 | 2 | 10 | 1 |

出所：琉球庄役場編『琉球庄管内概況』昭和13年4月8日、昭和13年11月27日及び琉球公学校編『学校沿革誌』より作成。

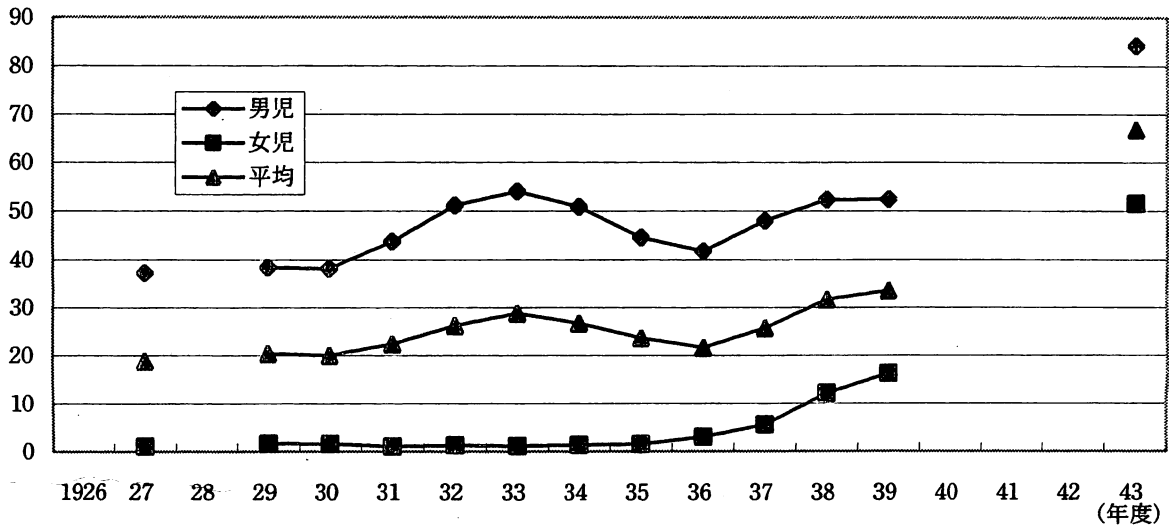
それ以外の教育施設としては、各部落に設置されていた簡易な教育施設である「全村学校」が10カ所、「国語保育園」が1カ所設置されており、皇民化運動の進展ぶりが伺える。「全村学校」は「国語講習所」より簡易な日本語を教える施設で、『学校沿革誌』の記録によると、1938年9月5日に開所式が行われている。この教育施設は、「国語講習所」よりも簡易な日本語を講習し、期間はそれぞれ4ヶ月程度、講師は青年団員等である。また、「国語保育園」は同年6月21日に開設された。

インフォーマントの中には「簡易国語講習所」に通った者もあれば、「全村学校」で学んだ者もある。両者の講習内容が似ており、元生徒自身がそれらを区別していないため、本稿では小琉球の国語普及施設を総称して「講習所」と称する。

島の有力な老人たちによれば、1938年以前にも「国語講習所」以外の教育施設はあったというが、残念ながら統計の不足のためにその普及程度を論じることはできない。概して小琉球の「国語講習所」および「簡易国語講習所」の設置数は、大きな変動を見せていない点で、東港郡の統計と同様の変遷をたどっているといえよう。ただし、小琉球には、「国語講習所」以外にも「全村学校」等の教育施設が皇民化運動の一環として導入され、各部落という小規模な単位で運動が展開されていたのである。

図5に示される通り、琉球庄の女児の就学率は非常に低い。1937年に10%に満たない状況であり、1938年によく10%代に上る程度である。男児は多少上下するものの、ほぼ50%前後の就学率である。前述したとおり、公学校に通っても途中で退学する者が少なくなかった。特に漁業が主たる産業であるこの地域では、漁の時期によって出席率が上下したであろうと想像される。1943年には台湾総督府により義務教育制が敷かれ、その結果、就学率は男児は80%以上となるが、女児は依然として50%強に過ぎない。本論文で扱う元生徒たち4名は、3名が1925年から1934年の間に、最も若年の1名が1934年から1940年の間に公学校就学年齢を過ごしている。彼女たちが公学校に行かなかったのはこの時代の女児一般の現象であることが、この統計からも明らかである。以下の節では、公学校に通えず、「夜の公学校」と呼ばれた「国語講習所」または「全村学校」に通っていた女性たちの人生を振り返り、彼女たちにとっての「講習所」の存在意義を探る。

図5 琉球庄学齡児童就学率
(%)



出所：琉球庄役場編『琉球庄管内概況』昭和2年度～14年度及び琉球公学校編『学校沿革誌』より作成。

第3節 「講習所」教育の対象とその背景

1. 調査の意図と方法

筆者は1997年から2000年までの間に小琉球に三回渡航した。それぞれ(1)1997年11月6日から13日まで、(2)1999年2月11日から17日まで、(3)2000年6月19日から23日までの三回であり、後ろ二回は面接調査のための渡航である。第一回目は小琉球王爺祭調査の助手としての渡航であり筆者自身の調査のためではないが、この時に調査対象となり得る人々との接触があり、特に村長、祭典の幹事といった島の有力者と知り合いになったことが続く二回の渡航を可能にした。

冒頭でも記したが、なぜ小琉球を調査地として取り上げたのかを述べる。日本統治下の台湾の国語普及に関しては、統計や新聞・雑誌記事によりその普及実態が議論されている。しかしながらそれらの多くは制度や政策を論じたものであり、実際に教育の現場にあった教師や生徒たちがどのように国語教育に関わったのかを論じるものではない。殊に小琉球のような日本人が希少且つ「中央」の政治的影響力から離れた地域で、学校教育を受けない民衆が何ゆえに「国語講習所」に通ったのかを明らかにすることは、この時期の国語普及運動が民衆レベルでどのように受け止められ展開されていたのかを知る上で、有意義であると考えられる。

小琉球という地域は、台湾本島から現在でもフェリーで30分程度、当時は帆船で6時間程度の離島である⁹。この島を調査対象とすることは、「中央」、即ち日本内地もしくは台北で発布された制度が、「地方」ではどのように展開されたかを知りうるのみならず、日本人がほとんどいないこの地域で「国語」がどのような機能を持ち得たかを明らかにすることができると考えられる¹⁰。また、すでに50年以上前のできごとを経験し記憶している人物がある程度の数生存して

いるのがこの地域であったという条件も、調査対象となった理由の一つである。都市部のような大幅な人口変動がないため、この地域には半世紀以上にわたって住みつづけている老人たちが少なからず存在している。

次に調査の方法であるが、本調査は「講習所」の教師と生徒を対象として、「国語」教育が彼らの内にどのように捉えられていたのかを知るために、彼らのライフヒストリーを聞き取る質的調査を行った。標本の抽出方法は、まず琉球郷漁業組合に勤め王爺祭の幹部を務める島の中心的人物の紹介で面会した日本語世代の老人たちや「講習所」の講師の聞き取りを足がかりにして、さらに彼らから元生徒を紹介してもらおうという「雪だるま式抽出法」(Snowball sampling)を採った。この抽出法は、人づてでしか知りえない「講習所」経験者たちの所在を探し出す上で有効であった¹¹。

第一回目の調査では生徒6名、教師1名に対して主に「国語講習所」の教育に関する質問を行った。続いて第二回目の調査では第一回目の調査対象者の中からさらに生徒4名(他の2名は健康上の理由等から面接不可)及び同教師1名に対し、彼らの生い立ち、家族構成、職業、趣味などを質問し、教育を受ける、または授けるようになったきっかけと「国語講習所」に対する感想等を質問した。調査は一回につき短い時は約40分、長い場合は2時間程度に及んだ。使用言語は「国語講習所」元講師に対しては日本語、生徒たちに関しては筆者の北京官語を通訳を介して閩南語に訳してもらい意思疎通を図った¹²。元生徒への主な質問項目は以下のとおりである。

- 1 現在の生活(1)家族構成、(2)日課。
- 2 家庭背景(1)両親の仕事と学歴、(2)兄弟姉妹の仕事と学歴、(3)宗教。
- 3 結婚するまでの生活(1)日課、(2)趣味、(3)結婚のきっかけ。
- 4 結婚後の生活(1)夫の仕事、学歴、(2)子どもの学歴、仕事。(3)日課。
- 5 講習所について(1)参加の動機、(2)参加通知書が来た時の気持ち、(3)授業で最初にすること、(4)島で日本語を見たり聞いたりしたか、(5)「国語家庭」を聞いたことがあるか、(6)教科書は誰がくれたか、(7)講習後に得たもの。
- 6 戦後の状況(1)その後日本語を学んだか、周囲で日本語が使われていたか、(2)北京語の必要を感じたか、学ぶ機会があったか、(3)今でも日本語を学びたいか、北京語を学びたいか。
- 7 人生で最も楽しかったことは何か。

講師に関しては、1、2に加え、

- 3 学歴
- 4 職歴
- 5 当時の日本語と漢文の使い分けについて
- 6 講習所について(1)講師になったきっかけ、(2)青年団の講習内容、(3)給料、(4)教育により生徒をどのようにしたかったのか、(5)「国語家庭」の有無、(6)教科書は誰がくれたか、(7)その時の自分のアイデンティティ、(8)講習の効果。

面接に際しては、これら質問を基にインフォーマントが自由に語る形式を採った。インフォーマントによっては、本人の性格や通訳との折り合いから、すべての質問項目を網羅できたわけではないが、人によっては質問したこと以上に積極的に語った者もある。彼女らの語りから、「講習所」が女性たちの人生の中で如何なる位置を占めたのかを明らかにすることができると思われる。

全般的に面接は順調に行われた。筆者は、殆どのインフォーマントたちが面接を好意的に受け止めていたという印象を持っている。あるいは昔を懐かしんで日本語を話す筆者に好意的に接したのかもしれない。そのため本調査の結果に偏りが生じている可能性は否定できない。ただし、先に示したように小琉球の「講習所」が一定の普及率を持ち少なからぬ民衆たちが通ったことを考慮すれば、彼女たちの語りもその一部として耳を傾けるに足るものだと考えられよう。

2. インフォーマントのプロフィール

本節では二回の調査の対象となった1名の教師と4名の女生徒たちの生い立ちを紹介する。それによって小琉球における社会教育の対象の階級や階層、そして彼らが教育に求めていたものが明らかにされよう。

(1) 教師、蔡U氏

蔡U氏（仮名）は1914年生まれの86歳（調査当時、以下同様）。毎朝5時に起きて散歩をするのが日課である。宗教は仏教。現在は妻と次男夫婦と同居している。

蔡氏の父親は漁業、母親は農業に従事し、いずれも学歴はなかった。しかし島民の間では蔡家は富裕な一家だと言われている。六男二女の長男に生まれ、本人は8歳で琉球公学校に入学14歳で卒業、五人の弟たちも次男は師範学校卒、三男から六男まで皆国民学校卒（本人の弁では「ほとんど卒業」）と当時としては高学歴である。

蔡U氏の学歴、職歴は次のとおりである。蔡氏は公学校を卒業した1934年、学校の小使となり、三年間勤めた後、高雄へ渡り高雄港灯台守を一年間務める。それから島に戻り漁業会に勤務し、書記を務めた。この頃（1937年から1940年前後）「国語講習所」で教鞭を執っていたという。琉球国民学校保存の琉球公学校編『職員履歴書綴』の蔡氏の記録と照合してみると、「国語講習所」講師に委託されたのは1944年4月30日であり、月給18円とある。蔡氏は1938年までに台湾総督府委託臨時教員養成講習会の講習課程を修了し、同年10月4日に月俸37円で助教に命じられ、琉球国民学校に勤務していた。実際「国語講習所」に務めていたのがいつなのかは、記憶と記録に差異が生じているが、1938年に「全村学校」指導員との記録があることから「全村学校」で教えていたのと混同しているのではないかと考えられる¹³。戦時中には「銃後後援会」にも勤務し、終戦直後は一年間代用教員を務める。後、1975年に定年退職するまで農業会に勤務、信用部の主任を勤めあげた。満20歳で結婚し、三男五女をもうけた。

筆者が見るところ、蔡氏は経済面、健康面、また子孫繁栄の面でも明らかに恵まれており、順調な老後を過ごしているように見受けられる。さまざまな恵まれた背景を持つ蔡U氏が、後に紹

介するように、当時無給で「全村学校」の講師を引き受けたことは納得できることである。

(2) 生徒1、陳C氏

陳C氏(仮名)は1921年生まれの78歳。宗教は道教。毎晩お経をあげるのが現在の日課である。一年前に胃を悪くするまでは果樹栽培をしていた。1999年には全島八村から一名ずつ選出される「模範母親」に選ばれた。夫亡き後は隣長(隣組長)を引き継ぎ、現在は長男夫婦と同居している。

陳C氏の父親は木造家屋を作る大工であったが、C氏が7歳の時に死亡、その後は母親が畑を耕しサツマイモなどの商品作物を栽培して家計を支えた。姉が二人いたが、いずれも20代で死亡、他に兄弟姉妹のないC氏は陳家を継ぐことになり、20歳の時に島の男性と結婚した。彼女の姓が一つなのはそのためである。

C氏を含め両親姉妹には全員学歴がなかった。一家は経済的に貧しく、食事は一日二回だけであったという。結婚前は「碧雲寺」に通うのが日課であり、また、服を作るのが趣味であった。20歳の時に結婚した夫は近所に住む2歳年上の男性だった。結婚はC氏の人生において、家に男が来る、また家族が増えるという点で大変うれしい出来事であったという。C氏は二男六女に恵まれた。子どもたちが小さいときはC氏の母親が世話をし、彼女は畑で働いたという。

「講習所」には1937年頃、彼女が16歳の頃から三年間通った。講習は一年に三ヶ月程度であった。これがC氏の人生で享受することのできた唯一の教育であった。彼女は「講習所」での成績が良く、島内の「国語演習会」に出席し、賞を受けたこともあるという。彼女の学びたいという気持ちはいまだに強く、筆者が訪問したとき、C氏は親戚宅から借りてきたという日本語教科書でかな文字を勉強中であり、筆者にモデルリーディングを頼むほどであった。

(3) 生徒2、林洪K氏

林洪K氏(仮名)は1928年生まれの72歳。現在は夫と二人暮らし。宗教は道教。毎朝4時に近所の「五王廟」に行くのが日課である。漁師を引退した夫は現在、「五王廟」で手伝いをしており、K氏は毎日食事を作り、薪割りなどの家事をこなしている。

K氏の両親は農業を営み、いずれも学歴はなかった。兄弟は、兄一人、弟一人、姉が三人、妹が二人。K氏は九人兄弟の五番目である。兄と弟は公学校に通ったが、K氏を含む六人の姉妹はいずれも学歴がなかった。結婚するまでは毎日畑仕事をしていた。結婚は19歳の時、夫は1歳年下のお見合い結婚である。夫の職業は漁師、子どもの頃公学校に通っていたことがある。夫婦は二人の息子と四人の娘に恵まれた。子どもたちが小さい頃は、日中は夫の弟の嫁が子育てを手伝い彼女は畑で働いたという。K氏は幼い頃から現在まで休むことなく日々働いて過ごしている。

「講習所」には1942年から43年頃まで、即ち本人が14、5歳の頃に1、2年間断続的に通ったという。

(4) 生徒3、許林H氏

許林H氏（仮名）は1922年生まれの77歳。現在は夫と雑貨店を営んでいる。宗教は道教。かつては朝3時、4時に起きて歩いて「碧雲寺」でお経をあげるのが日課であったが、現在は家の中でお経をあげる毎日だ。

H氏の両親は農業に従事していた。父親は島では当時数少ない公学校卒業者で、H氏は父親が識字者であったことを大変誇りにしている。母親は島の多くの女性同様に学校に通った経験はない。兄弟は兄が3人、弟が2人、姉が2人、妹が2人の五男五女である。H氏は三女である。次男と一番下の五女は幼い頃に亡くなり、四男と五男の二人の弟たちは家庭の経済的事情から養子に出された。姉たちは皆嫁いで農業に従事していた。

結婚前のH氏は牛の放牧、農作業、薪割りなどの仕事をしていて、そのほかにも衣服を縫ったりしていたが、趣味と呼べるほどのものはなく、また時間もなかったという。H氏が結婚したのは18歳の時、夫の職業は漁師、子どもの頃には公学校に通っており、日本語が流暢である。結婚してからは、幼い子どもをかごに入れ畑に出て、世話をしながら畑仕事をしたという。上の子どもが大きくなってからは、彼らに下の子どもの面倒を見させ、家族全員で家事を分担しながら生活してきた。三男二女をもうけている。

「講習所」には1937年頃、即ち本人が15歳頃から三年間通った。陳C氏と同級生であった。

(5) 生徒4、黄蔡S氏

黄蔡S氏（仮名）は1919年生まれの81歳。現在は夫と息子夫婦と同居している。毎朝4、5時に起きて近所の廟にお経をあげに出かけるのが日課である。

S氏の父母は「碧雲寺」と「三隆宮」という島最大の廟の管理人をしていたという。学歴はなかった。兄弟は彼女を含めて4人。兄、彼女、そして二人の弟である。兄弟たちは漁師であった。

結婚前の彼女の日課は、畑仕事为主であった。落花生やサツマイモが主要作物であった。そのほかにも他家の子供の世話やサツマイモ洗い、畑の施肥に井戸の水汲みなど、日々忙しく過ごし、趣味に割く時間はなかったという。結婚は20歳の時にお見合いでした。夫の仕事は造船、学歴はない。結婚後のS氏は4人の息子をもうけ、以前と同様に畑を続けながら子供を育てた。

「講習所」には結婚前に通ったという。何年かははっきりしないが、蔡U氏の授業に出ていたというので、1937年から39年、即ちS氏が18歳から20歳の間と思われる。

3. インフォーマントの特徴

生徒たちが「講習所」に期待していたものを論じる前に、彼女たちの生い立ちや背景などの特徴を整理しよう。

生徒4名は年齢が72歳から81歳。林洪K氏を除き、皆息子夫婦と同居している。また、陳C氏を除き、皆夫が健在である。彼らの生い立ちの主な共通点は以下のとおりである。

- ① 信心深い。宗教は民間信仰の道教であるが、現在の日課が廟へのお参りまたは自宅でお経をあげることである。これらは子どもの頃からの習慣である¹⁴。

- ② 両親は、許林H氏の父親を除き皆学歴がない。
- ③ 兄弟姉妹の中には養子・養女に出された者や死亡した者もある。学歴は、男兄弟は公学校中退または学歴なし、女姉妹は本人を含め全員学校に通った経験がない。
- ④ 結婚前は貧しく農業を中心とした仕事の毎日であった。結婚・出産後も畑仕事を続ける生活。なお、小琉球では男性の多くが漁業に従事していたため、農業は主に女性の仕事であった。
- ⑤ 「講習所」には結婚前に通った。
- ⑥ 夫とはお見合い結婚。夫の学歴は公学校中退またはなし。仕事は漁師や造船等いずれも漁業関係。
- ⑦ 多くの子どもの生まれ、そのほとんどが小学校卒以上。中には陳C氏の次男や許林H氏の三男のように高等教育を受け中学や小学校の教師になった者もある。

彼女たちは貧しい家庭に生まれ育ち、教育機会に恵まれなかった人々である。時代的に女に教育は無用という風潮があったとも思われるが、男兄弟ですら一時的に公学校に通った経験があるのみである。教師蔡U氏の兄弟のほとんどが公学校卒であることと比較すると、やはり彼女たちの家庭の経済的事情が良くなかったことが伺える。

また、彼女たちは子どもの時からずっと働き続けてきた。主に農作業であるが、子育ての最中にも休むことなく、働き詰めの人生であったといえよう。彼女たちはこうした状況下で夜「講習所」に通ったのである。彼女たちが講習に求めたものを次節で検討しよう。

第4節 小琉球の国語常用運動の実際-聞き取り調査を主として-

1. 通学の動機と講習の印象—自主的通学—

植民地における日本語教育は概して強制的な側面が強調されがちであるが、今回の面接調査から彼女たちは自主的に「講習所」に通っていたことが明らかになった。「講習所」から通知が来たり、教員が勧誘に来た時の気持ちを彼女たちは次のように表している。

勉強が好きだったからうれしかったわ。勉強が嫌いだったら行く必要はないでしょ。(陳C氏)

あの時先生が来て、招待されてみんなうれしかった。(黄蔡S氏)

あの時、政府から通知書を受け取って、みんなとてもうれしかった。なぜなら勉強もできるし、いっしょに出かける仲間もいるし。(林洪K氏)

私たちは自ら勉強しにいきたかったの。...(中略) みんな勉強しに行くのが好きだったわ。(許林H氏)

ここから明らかなように、彼女たちは強制されたのではなく、自ら望んで「講習所」に通っていたことが分かる。

講習に対する印象は、全般的に「楽しかった」という内容であった。何故に楽しかったのか、彼女たちの語りから挙げてみよう。

（勉強しに行くときの心情は）うれしかった。なぜならみな一緒になって出かけられるから。

（許林H氏）

仲間がいるからうれしかった。それに勉強もできると思うととてもうれしかった。（林洪K氏）

彼女たちは勉強をするために「講習所」に通ったのであるが、「仲間がいる」というのがもう一つの大きな要素であった。日中畑仕事に忙しい彼女たちは、日常、一緒に集まって活動することがほとんどなかった。勉強という知的楽しみのほかに仕事を終えてからの講習は、仲間と過ごせる時間でもあったのである。彼女たちの楽しみには、講習の登下校も含まれていた。仲間が誘いに来、そろって講習にでかける楽しみである。もっともそれは、暗い夜道を集団で登下校し安全を図るという意味も含まれていた。当時は電灯のない時代である。路は暗く危険であった。

暗い中を帰る時、「アズサ」の歌を歌っているときに転んで溝に落ちただけで、辺り一面真っ暗で一点の明りもなかったわ。...（中略）転んで田んぼの溝に落ちて、暗くてよく見えない、路はとても小さな一本の路、現在とは違っていたのよ。...（中略）時には転んで死ぬ人もあったのよ。（許林H氏）

実際、当時生徒たちが通った道を辿ってみると、オートバイでも10分程度かかる、今でも鬱蒼と草木が生い茂る山道であった。街灯のない当時、この道を徒歩で通うのはかなりの困難が伴ったことは想像に難くない。

さて、そこまでして彼女たちが通った「講習所」の講習内容であるが、講師蔡U氏や彼女たちの話から再現してみよう。

2. 講習の内容と効果—集団トレーニングと知識吸収—

夜7時から2、3時間続く授業ではどのようなことが行われたのか。まず、授業の最初にすることである。

その始めの時間（授業の始め）はね、みんな起立、座る。「君が代」を歌う。みんな、その、大概ね、私教えた生徒はね、大概「君が代」はみんな知っている。（蔡U氏）

授業の始めに教師にあいさつをするのは、当時の公学校や小学校のみならず、現在の初等教育で広く一般的に行われていることである。「君が代」斉唱もまた、当時の教育では欠かせない要素であった¹⁵。こうした始めの段取りは、当時社会教育、初等教育を問わず行われたようである。

そして、教室では座り方や並び方などの礼儀作法も教師から教えられた。これは、集団生活の訓練であるとも言えよう。

ところで、「国語講習所」には教科書があった。教員、生徒たちに確認したところ、使用されていた教科書は、「国語講習所」用に編集された台湾教育会編『新国語教本』巻1 (1933年) またはそれと類似のものである。当時台湾各地で行われていた社会教育ではさまざまな教科書が使われていたが、現存するものを見ると多くがこの台湾教育会のもとの内容的に類似している。インフォーマントの一人陳C氏は、教科書の一文を暗記して覚えており、それがこの教科書の中に記されているくだりであったことから、当時小琉球で使用されていた教科書は台湾教育会編の『新国語教本』巻1である可能性がある¹⁶。なお、この教科書には指導書である『新国語教本教授書』巻1 (1934年) があるが、講師蔡U氏に確認したところ、当指導書は使用していなかったとのことであった。

教科書の大まかな内容を概観する。単語と場面別の会話や物語そして挿絵で構成されるこの教科書は、今日の外国人向け日本語教科書と大差ない印象を受ける。教科書は巻2、巻3と高度になるに従い「天長節」「明治節」など天皇制に関する課が見られるようになるが、巻1に限っては日本語教育初歩の性格が強い。

講師蔡氏によると、授業では日本語と台湾語を混ぜながら、文字の学習、ペアでの会話練習などが行われた。これらの授業内容はむしろ外国語としての日本語教育と文字の学習が主である。生徒たちに確認したところ、五十音、数字、身振り手振り付きで唱歌の練習、ペアでの会話練習などがあり、人によっては文字を書く宿題が課されたという。また、蔡氏によると唱歌やおどぎ話なども教えられた。

講習の効果である。簡単な日常会話はできたと言った生徒たちは言う。事実、面接の間にも、あいさつ言葉に加え、「あなたはどこに行くのか」などの表現が日本語で飛び出した。50年以上前のことである。当時はもっと日本語で会話ができたという彼女たちの言葉は、誇張でもなかろう。講師蔡氏も講習後の生徒たちは簡単な言葉はできたと語っている。また、文字も同様にある程度習得されていたと想像できる。

一方、集団トレーニングの効果も見られる。講習前と後で、女性たちの態度が変化したというのである。

蔡U氏：えー、精神力も、その精神も変わる。それが、あと、話し振りが言葉も、以前のまだ「国語講習所」に入った以前の、発言よりも違ってくる。... (中略) 講習の前はね、あまり、とにかくその、社会のことの記憶がね、ちょっと少ないんだ。「国語講習所」に入って社会教育受けてね、それで初めてこの社会はだんだんこんななんだ、進歩しているという記憶がね、頭に入ってくる。

講習所の教育は、言葉の教育のみならず、社会で生活するための最低限の訓練と知識の伝授であったと言えよう。生徒の中には、家で炊事をしながら地面に文字を書いて練習した(一回目の

調査より）という者もある。電灯のない時代である。授業は蠟燭の火を灯して行われた。熱心に勉学に励み、講習を通じて何かを吸収しようとしていた者も少なくなかったようである。生徒たちは皆、講習は楽しかったと語っている。仲間と一緒に勉学に励む喜びと、日常を超えた知識の吸収への希求が彼女たちを「講習所」へと運んだのであろう。

3. 講習会場と教員—地域運動としての社会教育—

「国語講習所」の会場は、記録の上でも、講師蔡U氏との面接からも琉球公学校で行われたとされている。しかしながら生徒たちに講習の会場を尋ねると、多くが個人の家を挙げた。この差異は、蔡U氏に話を聞くうちに解明された。

前述したように、「国語講習所」として生徒たちが認識しているものには当該講習所の他に「全村学校」が含まれる。蔡氏の話では「全村学校」は、より簡易な日本語教育を個人の家や庭などで行い、大抵はここを経てから公学校に設置されている「国語講習所」に進むのだという。これは生徒の陳C氏が、三ヶ所での講習を終えてから公学校での講習に参加したという証言からも裏付けされる。『琉球公学校学校沿革誌』の記録では、「全村学校」では試験も行われている。まっとうな教育機関と見てよいだろう。

こうした「全村学校」は、「国語講習所」と違い総督府や州庁によって制度化されたものではなく、自主的な社会教育機関であったといえる。講師は無給で、会場も個人宅がほとんどである。陳C氏と同級生の許林H氏の通った三ヶ所の「全村学校」会場は、(1) 杉福村の教会、(2) 杉福村の陳氏宅、(3) 上福村李氏の庭園の三ヶ所である。(1) 杉福村の教会とは、島唯一の基督教教会である。当時は宗教を問わず社会教育に協力的であったことが伺える。(2) 杉福村の陳氏がどのような人物であったかは不明であるが、(3) の上福村の李氏が保甲役員であることから、陳氏も保甲役員または区総代などの有力者ではないかと想像される。(3) 李氏とは、保甲役員の李西炮氏のことである。『琉球庄管内概況』によると、李氏は1934年に保甲書記として琉球庄の協議会員となり、1937年には島内4区中の第2区総代となっている。「国語の解否」欄には「解」とある。記録を見る限り島内で有力な人物と思われる。実際、李氏の自宅を訪ねてみると、現在は洋風な館が建っていたが、当時講習を行った庭園は今でも残っており、広い敷地に木々が濃い影を落としていた。講習会場はこのように、「全村学校」は地域の有力者の自宅や教会、「国語講習所」は公学校であった。では実際に教壇に立つ教師はどうであっただろうか。

蔡U氏によると、講師は公学校卒業の者であったという。生徒たちの話では講師は皆台湾人であったという。確かに表2に示されるように「国語講習所」講師たちは全員が台湾人である。表2から琉球庄「国語講習所」の講師には次のような特徴が挙げられる。(1) 台湾人である。当時の区分では「本島人」であるが、小琉球「国語講習所」には記録を見る限り日本人講師はいない。

(2) 講師の年齢が若い。講師は最年少は16歳、最年長でも若干31歳である。(3) 専任講師が少ない。専任講師はわずかに3名を数えるのみで他は兼任講師である。(4) 講師の学歴は初等教育修了程度が大多数である。公学校または国民学校卒業が最も多く、その中でも修業年限6カ年の公学校・国民学校卒が多数おり、中には高等科修了者もいる。一方3カ年の国民学校修了の者

表2 琉球庄「国語講習所」講師一覧表

| 氏名 | 生年 | 原籍 | 学歴、資格及び主な職歴 | 任命先及び職位 | 月俸 | 任期 |
|------|------|---------------|--|--|------------------------------|--|
| 蔡天助 | 1913 | 高雄州東港郡 琉球庄 | 琉球公学校(3ヵ年)修了 | 琉球庄特設第二種国 語講習所、専任講師 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 35 円 18 円 | 1943.4.30 ~7.14 1944.4.30 ~8.1 |
| 蔡有明 | 1914 | 高雄州東港郡 琉球庄 | 琉球公学校(6ヵ年)卒業、琉球庄 全村学校指導員(1938.9.5)、州主催 第二回国語講習所専任講師講習 会受講(1939.8)、郡主催国語講習 所専任講師養成講習会修了 (1940.6) | 大寮国語講習所、専 任講師 | 20 円 | 1939.4.18 ~1940.11.9 |
| 許氏秀月 | 1917 | 高雄州屏東市 販来 | 私立台南長老教女学校(4ヵ年)卒 業、屏東市販来第二回国語講習所講 師(1936.4.6~1938.1.15) | 琉球庄特設第一種国 語講習所、講師 | 35 円 | 1941.4.1 ~1943.4.30 |
| 洪先助 | 1921 | 高雄州東港郡 萬丹庄 | 萬丹公学校本科(6ヵ年)卒業、萬 丹農業補習学校(2ヵ年)卒業 | 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 18 円 | 1944.4.30 ~? |
| 吳徳武 | 1924 | 高雄州東港郡 新園庄 | 山坎頂公学校本科(6ヵ年)卒業、 萬丹農業専修学校修了、府委託臨 時教員養成講習会修了(1942.11) | 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 18 円 | 1944.4.30 ~? |
| 林水鏡 | 1924 | 高雄州東港郡 林邊庄 | 林邊公学校(6ヵ年)卒業、東港実 業国民学校(3ヵ年)卒業、州臨時 教員養成講習会(2ヶ月)修了 | 琉球庄特設第一種国 語講習所、講師 琉球庄特設第一種国 語講習所、講師 | 10 円 20 円 | 1941.4.1 ~1942.1.6 1942.3.31 ~1943.2.28 |
| 洪榮華 | 1925 | 高雄州東港郡 琉球庄 | 琉球国民学校初等科(6ヵ年)卒業、 府主催国民学校臨時行員養成講習 会修了、州主催国語講習所講師 講習会修了 | 琉球庄特設第二種国 語講習所、専任講師 琉球庄特設第一種国 語講習所、講師 | 17 円 18 円 | 1940.12.16 ~1943.1.8 1943.3.31 ~1945.1.31 |
| 蔡 實 | 1926 | 高雄州東港郡 琉球庄 | 東港実業専修学校(3ヵ年)卒業 | 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 18 円 (1944.7.31、 21 円) | 1944.4.30 ~1945.3.31 |
| 張廷瑞 | 1926 | 高雄州東港郡 林邊庄 | 琉球国民学校(3ヵ年)修了、府 主催国民学校臨時教員養成講習 会修了 | 琉球庄特設第一種国 語講習所、講師 | 16 円 | 1944.3.31 ~1945.2.28 |
| 陳 樹 | 1926 | 高雄州東港郡 琉球庄 | 琉球国民学校初等科(6ヵ年)卒 業、青年学校指導員(1944) | 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 30 円 | 1943.8.10 ~1944.3.24 |
| 蔡漏乾 | 1927 | 高雄州東港郡 琉球庄 | 東港実業専修学校(3ヵ年)卒業 | 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 28 円 | 1944.4.30 ~1945.2.28 |
| 荘国忠 | 1927 | 高雄州東港郡 新園庄 | 国民学校高等科(2ヵ年)卒業、府 主催国民学校臨時教員養成講習 会修了 | 琉球庄特設第一種国 語講習所、講師 | 16 円 | 1944.3.31 ~1945.1.31 |
| 胡振輝 | 1928 | 高雄州東港郡 新園庄 | 国民学校高等科(2ヵ年)卒業、府 主催国民学校臨時教員養成講習 会修了 | 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 18 円 | 1944.4.30 ~1945.3.31 |
| 洪氏錦雀 | 1928 | 澎湖庁西嶼庄 | 国民学校高等科卒業、府主催国民 学校臨時教員養成講習会終了 | 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 16 円 | 1944.7.31 ~1945.2.28 |
| 陳氏雪子 | 1928 | 澎湖庁白沙庄 | 国民学校高等科卒業、府主催国民 学校臨時教員養成講習会終了 | 琉球庄特設第二種国 語講習所、講師 | 16 円 | 1944.7.31 ~1945.3.31 |

出所：琉球公学校編『職員履歴書綴』より作成。

や実業専修学校卒業の者も若干名いる。(5) 教員の資格を有していない。講師たちは初等教育程度を修了した者で、その多くが台湾総督府主催の国民学校臨時教員養成講習会を修了している。これは戦時中の人材不足による代用教員と同様のものであろう。(6) 給料は10円から35円の間である。多くの講師が16円から18円程度であり、この金額は毎晩2、3時間の講習による月俸としては少ないとは言えないであろう。全般的に小琉球の「国語講習所」講師は初等教育修了程度の教養を備えた年齢の若い人物であったようである。人口の少ない離島で教員免許を有する者を探すのは時勢を考えても困難なことである¹⁷。

一方、「全村学校」であるが、前述のように「全村学校」は当地域の自主的な活動であるため、政府からの援助はない。「全村学校」の講師となっただいさつを、蔡U氏は語る。

筆者：どうして（「全村学校」は）俸給がないのに教えに行きましたか。

蔡U氏：その時はね、...（中略）とにかく女たちは学校に入らないね、何も分からないだから、非常にこれは、大きくなったらね、非常に何の仕事してもあまりうまく、あまりいかなかったからね。それで私が「率先示範」ね、まあ、一つの社会のね、社会の何と言うか、あの社会の経験でね教えて、将来「せんじゅう」（？）になったら、非常にうまい人になれるぐらいな、その精神で教えてやったんだ。

筆者：これも校長先生が命令しましたか。

蔡U氏：ええ。校長先生が大体その、主人としてやっていた。何か、見ても非常に同情心があるだから非常に来なさいと。その時は校長先生は私の親戚なんだ。

ここに現れているのは、給料を度外視して教育機会に恵まれなかった女性たちに社会で生きていくための知識を教えようとする教師の姿である。島内10カ所の「全村学校」講師たちは全て無給である。蔡氏のように、女性たちに社会で生きていくための教養を与えようとした教師も少なくなかったのではないだろうか。

小琉球の民衆の国語普及運動は、「全村学校」と「国語講習所」を中心に進められた。蔡氏によると「全村学校」は「国語講習所」の下部組織である。そうしてみると、各部落に置かれたこの民間の夜学校は国語普及組織において最も末端に位置付けられる。総督府主導の国語普及とともに、地域が主体となった国語普及が行われていたのである。

4. 講習に求めたもの一識字、そして更なる可能性を求めて一

生徒たちは、講習に何を求めたのであろうか。自主的に勉強のために通っていたというが、学ぶことによって自分がどうなりたかったのであろうか。インフォーマントの答えは大きく二つに分かれた。一つは、識字である。

皆、文字を知りたかったの。...私は文字を知ればそれでいいと思っていたわ。当時の人間は教育を受けて何かをしようとはまでは考えなかったわ。（許林H氏）

事実、識字というのが講習に当たった講師の一つの大きな目標であった。蔡U氏は語る。

これがあとでねやっぱし、字を知らないとね、自分の名前も書けない。非常に不便。それで、その関係でね、「講習所」に入ったんだ。実際は自分の名前も書けない者は非常に不憫ですよ。

とにかく文字を知りたいというのが、インフォーマントたちが講習を通じて求めたものであった。上述の許林H氏のように文字を知りさえすればよいという考えの者のほかに、第二に、教育を通じて自分の人生を変えようと考えた者もあった。

最も熱心な生徒だったと自称する陳C氏である。父親の夭折に姉たちの事故死、そして食事も満足にとれない貧困生活など、恵まれない環境で育ってきた陳C氏は、「講習所」以外に教育を受ける機会がなかった。一日も欠かさず講習に通った彼女は文字を知って、どうなりたかったのであろうか。

勉強して、みんな教師になりたかった。... (中略) (「講習所」の) 教師になるには試験はなかったわ。夜学 (「講習所」のこと) の教師は本当の教師ではなくて勉強をしたことのある人だったの。... (中略) あの頃は教師になるのは簡単だったわ。

陳C氏が言うように、「講習所」の講師は公学校を卒業した者など、ある程度の教養がある人物であり、教員免許は必ずしも必要ではなかった。実際、〈表2〉で示したとおり小琉球の「国語講習所」講師には教員免許を有する者が一人もいなかった。陳C氏は教師になりたかったというのである。

陳C氏：あの時学び終わって、何度も何度も考えたわ。(教師になる) 方法はないかって。

陳C氏は、「講習所」で学んで教師になる道を模索していたのである。彼女にとって「講習所」は、単に文字を教えてもらう所ではなく、職業を変えるチャンスを得る場所でもあったのである。残念ながら、その後彼女の望みが達成されることはなかった。「全村学校」を修了した陳C氏は、公学校に設置されている「国語講習所」へ通おうと初日の授業に出るものの、暗い夜道をひとりで通いきれずに通学を一日で断念する。「国語演習会」で賞をもらうほど勉学に熱心であった陳C氏の無念さは想像に難くない。インフラの不整備がひとりの少女を勉学の道から遠ざけてしまったのである。

島の老人たちの話では、当時「講習所」で成績のよかった女性たちは島を出て台湾に渡ったという。陳C氏が望んだように「講習所」での教育をもとに、台湾で職業を得るなり、結婚相手を探すなりして島を離れていったのであろうか。今となってはその結末を知ることは困難である。

面接調査を通じて、生徒たちは識字と自分の可能性の拡大を講習に求め、講師もまた彼女たちの自立を目指し教育していたことが明らかになった。社会教育が初歩的日本語教育や社会的知識

の教授に止まる傾向にあったということが、小琉球に限られたことかどうかは今後さらに検討を要する問題である。しかし、全島レベルでの女性の就学率の低さを考えれば、台湾各地でこのような現状があるからこそ総督府は当時の新聞雑誌を通じ繰り返し国語教育は単なる言葉の教育ではなく、それを通じ日本精神が培われなければならないと主張していたのだと仮説的に考えることもできる¹⁸。

第5節 おわりに

小琉球における面接調査から、「国語講習所」は基礎的教養を習得する場所と捉えられていたことが分かる。教師は生徒に識字などの社会で生きていくための教養を与え、生徒もまた文字を知り、あるいはそれを通じて自分の人生を変えようと考えていた。これらは教育一般に含まれる要素であり、無料で仕事の障害にならない夜の講習が学校に通えない少女たちに受け入れられたのはごく自然のことと言えよう。台湾総督府は高い国語普及率を対外的宣伝材料に使ったが、小琉球に限って言うならば、国語普及運動が盛んになったのは国語教育に含まれる識字や一般的な教養によるところが大きく、総督府が掲げる「日本精神の涵養」は初歩的な教育を受ける社会教育の現場では強調されていない印象を受ける。

当時の小琉球の人口は5000人強であるが、総督府の国語教育機関である「国語講習所」「簡易国語講習所」が時期によって多少変動するが合わせて4ヶ所程度、「全村学校」が各部落に1校ずつの計10校と、国語普及施設の設置数は決して少なくはない。殊に地域の自主的な国語普及組織「全村学校」が存在していたことは興味深い。おしつけや必要に駆られての日本語習得であるならば、このような自主的な組織はできないであろう。小琉球には日本人が数えるほどしか存在せず、一部の知識人が警察や庄長と話すのを除いて、民衆が日本語を聞いたり話したりする機会はなく、日常生活では閩南語が話されていた。彼らの間では日本語は書き言葉や知識を吸収するという、日常的言語生活に属さない言語と捉えられていたと考えられる。そして日本語がこのような性格を帯びていたからこそ自主的な教育組織が設けられ、その普及が促進されたのであろう。「国語」である日本語は明らかにこのような機能を有していた。

また、「講習所」の経験が女性たちの人生の中で意義深かったということが面接から浮き彫りになった。人生で最も楽しかったことは子孫に恵まれたことと答えたインフォーマントも多い中で、林洪K氏のように「講習所」に通ったことが楽しかったと答えた者もある。また、陳C氏のように未だに日本語を独学で学んでいる者もある。彼女たちにとっての「講習所」は、唯一教育を受けられる場所であった。それ以外の選択肢は存在していなかったのである。実際、インフォーマントたちにはその後にも先にも、教育を受ける機会は与えられなかった。「講習所」の教育は、彼女たちの人生の中で大きな影響力を持ったと言えよう。

小琉球の事例に即するならば、日本統治下台湾社会の高い国語普及率をもって日本語教育が押し付けられたと考えるのは当時の国語普及運動の性質を見落としているであろうし、逆に日本の統治が受け入れられたと無批判に結論付けるのも問題であろう。むしろ、本論文の主題である国

語普及に限って言うならば、教育を受けたい、授けたいと考えていた人々が主体となって、意識的にしろ無意識的にしろ台湾総督府の政策を受け入れ、その中から望むものを得ようとしたと解釈できる。台湾本島における農村部でも、同様の事態を見いだすことができるかどうか、今後さらに検討していきたい。

注

- 1 例えば、先駆的研究に呉文星「日據時期台湾総督府推廣日語運動初探」(上)、(下) (『台湾風物』第37巻:1期、4期、1987年)、また周婉窈「台湾人第一次「国語」経験一析論日治末期的日語運動及其問題一」(『新史学』第6巻:2期、1995年)などがある。
- 2 台湾知識階級の国語教育への反応を扱ったものに陳培豊『同化の同床異夢—日本統治下台湾の国語教育史再考—』三元社、2001年がある。ただし本書では民衆レベルの国語普及運動は論じられていない。
- 3 台湾の「口述歴史」の動向に関しては許雪姬「台湾口述史的成果與評估」(中国近代史学会編『口述歴史研習營』、台北:1999年)を参照。日本国内の面接やアンケートを利用した研究には例えば山本禮子『植民地台湾の高等女学校研究』多賀出版、1999年などがある。その他特定の人物や原住民に対する面接調査も行われているが、民衆のライフ・ヒストリーを聞き取る調査は未だ少ない。
- 4 藤森智子「1930年代初期台湾における国語講習所の成立とその宣伝」(『法学政治学論究』第40号、1999年)、95-98頁。
- 5 同上論文、108-110頁。
- 6 地元民の話では、「小琉球」は台湾でも最も寺廟の多い地域であるという。祖先を祭った小さな廟が島の至るところに見られるのがその所以である。
- 7 小琉球の原住民に関しては、曹永和「小琉球原住民的消失-重拾失落台湾歴史之一頁-」(潘英海、詹素娟編『平埔研究論文集』、台北:中央研究院台湾史研究所、1995年)を参照。現在小琉球に伝わる「烏鬼洞」の伝説は、黒人奴隷が洞窟でオランダ人により焼き殺される内容であるが、実際には数百に上る原住民がここで生きながら焼かれたのである。
- 8 『琉球庄管内概況』等の記録を見る限り、この島には「書房」は存在していなかった。また、島の有力な老人たちとの面接でも「書房」はなかったと語られた。
- 9 面接調査の中で、「国語講習所」の講師を務めた蔡U氏は、当時小琉球から台湾本島へは帆船で渡ったと述べている。風任せであったため所要時間は6時間、それ以上かかることもあったという。
- 10 『琉球庄管内概況』によると、当時島にいた日本人は戸数が3戸から4戸、人数はわずか10名前後である。それらは医者や警察であり、記録では医者宇田薫氏が1931年まで庄長をも務めている。日本人の学齢児童は皆無である。
- 11 公学校等卒業生と違い、生徒の出入りの多い「国語講習所」は名簿もほとんどなく、修了生たちの所在を知ることは地元で詳しい人物の紹介がなければ困難である。
- 12 通訳は、主に島の中心的人物洪賜隆氏と妻で杉福村村長の洪美月氏の両名が行った。両名の都合がつかないときは、両名の知り合いの帰省中の大学生が務めた。
- 13 このような「国語講習所」と「全村学校」の混同は、他のインフォーマントにも見られるものである。本論文でこれら国語普及施設を一括して「講習所」と称するのは、彼らの言葉を借りたものである。
- 14 当初接触した老人たちの中にはキリスト教徒もいたが、結果的に対象となった人々全員が同じ宗教となった。
- 15 蔡U氏は「君が代」の歌詞の内容も教えたと言うが、生徒たちの中には「君が代」歌を知らない(あるいは覚えていない)者もあった。社会教育においてこうした国家主義的要素がどれだけ徹底されて

いたかは検討の余地があろう。

- 16 陳C氏は「雨が降りそうですね。向こうの空が真っ黒になりました。」という文章を暗記して覚えていた。これは、台湾教育会編『新国語教本』巻1、21課の文章である。
- 17 「国語講習所」講師の特徴は地域により差異がある。例えば、台北県三峡街の場合、三峡公学校編『教員履歴書』の記録を見ると、少なからぬ「国語講習所」講師が公学校（または国民学校）の教員免許を取得しており、「国語講習所」は公学校教員の空きがない場合に配置される傾向があったようである。
- 18 台湾総督府による「国語講習所」が日本精神涵養の場であるという宣伝に関しては、藤森、前掲論文、108-110頁を参照。